
バカと少年とドタバタ生活

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少年とドタバタ生活

【Nコード】

N4289Y

【作者名】

S

【あらすじ】

二人の少年が居た。

一人は嘗ての自分を殺し生きている少年『吉井明久』。

もう一人は明久が嘗ての自分を殺す原因になった一つ『桐岡 隼人』。

二人は許し合うことができるのか？

二人の物語が今、始まる。

追伸 タイトルがどうも合っていないような気がしますですが気にしないでください。それともし、何か新しいタイトル候補があったらコ

メントください。

ぶろろーぐ（前書き）

やっってしまった……

つい、知り合いに『バカテスの二次創作も書け』と言われて書いてしまった……

既に『tinami』の方も合わせ八個も作品を投稿しているのに……

八個も投稿しているので不定期になります。

それに計画性はまったくありません。

今から二人の過去を考えている位です。

それでも『バッチコイ!』と言っなら応援よろしくお願いします。

ぶろろーぐ

「吉井明久……」

俺を裏切りそして俺が裏切った男……
だから俺はあいつに嫌われている……
しょうがないんだ……

「でも……」

俺はあいつを嫌って無い。
もう許している……
だから……許してほしい……

「教えてくれ……明久」

お前は どうしたら俺を許してくれるんだ？
死ねと言っんなら死ぬ。
だから許してほしい……
お前を裏切ったことを……許してくれ……
俺はそんなことを思いながらゆつくりと歩き出し
大勢の人混みの中に溶けて行っった。

明久 side

懐かしい夢を見ていた様な気がする。
そう……あれは……『俺』が死んだ時の記憶だ。
『俺』はあの時死んで『僕』になっったんだ。
あいつが『俺』を裏切って『俺』があいつを裏切った。

だから、『僕』はあいつに嫌われている……

「教えてくれよ……どうしたら『俺』を許してくれるんだ？」

お前はもうしたら『俺』を許してくれるんだ？

死ぬと言っんなら死ぬ。

だから許してほしい……

お前を裏切ったことを……許してくれ……

『僕』はそんなことを思いながらゆっくりと目を瞑った。

ぶろろーぐ（後書き）

今日はこれとキャラクター紹介を投稿します。
これからよろしく願います。
では、また次回。

キャラクター紹介（と言ってもオリ主と明久の二人だけ）

『桐岡隼人』

本作品の主人公。

正確はクールだが実は優しい。

髪の色は黒髪。

自分自身の強さとしてはFFF団と戦っても余裕で勝てて鉄人と良い勝負ができる。

召喚獣を使えば鉄人さえ余裕で倒せる。

召喚獣の服装は完全黒。

因みに祖父が学園長の知り合いで隼人は召喚獣のデータ採取の為にとも召喚獣を扱っていた。

超天才で本人曰く『俺にとって満点なんて普通だ』とのこと。

勉強しないでも全教科600点は取れるが組み分けテストの時に気分が悪く欠席した。

『吉井明久』

本作品のもう一人の主人公。

相当優しいが自分のこととなると超鈍感。

嘗て自分のことを『俺』と言っていた。

隼人並に天才だったがあることが切欠でその時の自分を『殺した』

隼人と同じくらい喧嘩が強いが本気は余程のことが無い限り出さない。

一話 クラス振り分けテスト（前書き）

こんにちわ

何だか書きたくなって書きました。

後悔はしてません。

では、始まり

一話 クラス振り分けテスト

明久 s i d e

僕はクラス振り分けテストを受けていた。

確かクラス振り分けテストは相当難しいと聞いてたんだけど……

「……子供の遊びか？」

簡単過ぎる。

でも、頭の良かった『俺』はもう死んだ。

だから僕は……わざと間違った答えを書いた。

隼人 s i d e

まさか、こんなことになるとは……

「くしゅんっ！」

俺は今家のベットで横になっている。

昨日はちゃんとしていた筈だったんだが……

「クソ……今日はクラス振り分けテストなのに……」

文月学園は実力主義だからFクラス決定だ。

あのクソババアことは良く知っている。

あのクソババアは俺がいくら抗議しても聞く耳持たないだろう。

「ああ……！いらつく！」

西村はどうせ抗議するんだろうな。

西村はあんな顔をしているが結構良い奴だ。

それでもあのクソババアは聞き届けない。

誰が何と言ってもあのクソババアは自分の意見は変えないんだ。

だからいくら考えても無駄。

よって俺に出来ることは……

「寝ることだけ……くしゅんっ！」

もう寝よう……

そう思つて俺は目を瞑つた。

明久side

「吉井、遅刻だぞ」

学校の玄関の前でドスの利いた声に呼びとめられて声のした方を向くと鉄人……もとい

西村先生が立っていた。

「すみません。」

西村先生、おはようございます」

「ああ、ほら、受け取れ」

そう言つて鉄人は僕に封筒を渡す。
クラスの編成が書いてある。

「こんな面倒なことよくやりますよね」

掲示板とかで大きく張り出せば良いのに。
そんなことを思っているのは僕だけじゃ無いはずだ。

「まあ、うちは世界にも注目されてる最先端システムを導入した試験学校だからな。

この変わったこの変わったやり方もその一環って訳だ」

鉄人の言葉を八割位スルーしながら封筒を開ける。
そして、中に入っている紙にはこう書いてあった。

『吉井明久 Fクラス』

やっぱりか……

しょうがないよな……

わざとだから。

「じゃあ、僕は教室に行ってきます」

そう言っただけはその後から立ち去る。

「お前はいつになったら本気になるんだ……」

鉄人の呟きを聞かなかったことにして……

F組クラス

突然だが僕は今困惑している。

何でかと言うと実はここに来る前にAクラスの教室を見たんだが……ノートパソコンや個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他諸々……

ここはホテルか？と思った。

それは置いておいてそれが困惑の原因じゃない。

Fクラスの設備が原因だ。

今、僕はこの教室に着いたばかりで少し見たただけだけどここホントに学校？

って思うくらいひどい。

窓ガラスは割れて黒板もボコボコ。

椅子も無い。

これは本当にひど過ぎる。

それに……

「おい、さっさと入れ蛆虫野郎」

何で雄二がここに居るんだ？

『元』神童の筈なのに。

「今、すごく失礼なことを思われた様な気がするけど気にしないで
おこつ。」

早く入れ」

「……雄二、何やってるの？」

多分、雄二がこのクラスの代表なんだろう。

何たって『元』神童だからな。

「俺がこのクラスの代表だ」

「……やっぱりか」

まあ、何でも良いや。

そんなことを思っていると先生らしき人が教室に入ってきた。

「取りあえず座ってください」

僕はそう言われて席に着いた。

「二年F組の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は黒板に名前を書こうとするが……チョークすら用意されてなかったからやめた。

「皆さん全員に座布団と卓袱台は用意されてますか？不備があれば申し出てください」

最悪の設備だ……

これが最悪のクラスの不遇か……

「先生！俺の座布団があんまり入ってません！」

「我慢してください」

代え位よろしうよ……

「では先生！『では自己紹介を始めましょう』え？無視ですか？」

すると、教室の扉が開いた。

どうやら遅刻者が居たらしい。

遅刻者は二人らしい。

俺はその二人の顔を見て驚いた。

一人はAクラスでも上位に入っているだろう少女。

『姫路瑞希』

クラス全員が何で彼女がここに居るか理解できないだろう。

だが、真に僕が理解できていないのはもう一人の方。

嘗て彼に逆らう奴は一人残らず体をズタズタにされ

全世界の裏社会の人間から恐れられた『鬼神』

「桐岡隼人……！」

何で奴がここに……！

嘗て僕を……いや『俺』を裏切り『俺』が裏切った男。

そんなことを考えているとあいつは『俺』を見てそして驚いた顔をした。

「……………！」

口が動いて何か言っていたが聞こえなかった。
でも、何を言っているかは分かった。

『吉井明久……！』

こう言っただろう。

これからどうなるんだ……この学園生活は……

隼人 side

「吉井明久……！」

何で奴がここに居る！？

奴の学習能力ならばAクラスなんて余裕でなれた筈だ。
なのに何故……なのに何故だ！？

「二人共、自己紹介をしてください」

担任らしい人がそう言う隣にいた女子が自己紹介を始める。

「姫路瑞希です。」

よろしく願います」

小柄な体を更に縮こめるようにして姫路と名乗った少女はそう名乗った。

まるで何処かのお姫様の様だ。

すると生徒の一人が手を上げた。

「質問です！どうしてここに居るんですか？」

普通に考えればクラス振り分けテストでそう言う成績を取ったと言うのが答えだろう。

だが、どうやらこの女子は相当優秀らしい。

「テストの時に高熱を出してしまって……」

身体が弱いらしい。

それであのクソババアがFクラスに落としたと言っ訳か。
しょうがないと言えましょうがないだろう。

「では、桐岡君、自己紹介をお願いします」

「桐岡隼人。

趣味は特にない。

それだけだ」

俺が名乗ると生徒が騒ぎ出す。

『おい、確か桐岡隼人って……』

『ああ、かつて仲間をボコボコにされた恨みで一つのマフィアをぶ
っ潰した男だっけ聞いたぞ』

『俺は全世界の裏社会から恐れられてるって聞いたぞ！』

『何でそんな奴が……』

どうやら噂は尾を引いているらしい。

俺はそこまで怖くない。

それにマフィアじゃなくてアメリカの暴走族の間違いだ。

「では、二人共席に着いてください」

そう言われて適当に席に着く。
すると自己紹介が再開された。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

あいつ女か？

それとも男か？

良く分かん。

「……土屋康太」

結構物静かだな。

「島田美波です。

趣味は吉井明久を殴ることです」

吉井……可哀想に……

死んだら墓を建ててやろう……

そこら辺の石で。

「えーっと、吉井明久です。

気軽に『ダーリン』って呼んでください」

『『ダアアアーリイン！！！！』』』

何だ今の！？

あいついつの間にかそっち系の奴等に狙われる様になったのか！？

「失礼。忘れてください」

そう言つて明久は席に座つた。

そして最後に赤髪の男が立つた。

「坂本雄二だ。よろしく頼む」

それだけで終わっと思ったが終わりでは無いらしい。
坂本はこう続けた。

「お前等、この教室の設備を見る」

そう言われて生徒全員が設備を見る。
これが設備なのか疑わしいところだ。

「この設備に不満は無いか？」

『『『大ありじゃあああつ！！！』』』

魂の叫びだな。

一瞬割れてない窓が揺れたぞ。

「これは代表としての提案だが……」

そこで一端きり野性味満点の笑みを見せ坂本はこう言った。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

これから二年F組としての俺のドタバタ学園生活が始まった。

一話 クラス振り分けテスト（後書き）

分かりにくいでしょうが隼人は一年から居ました。

一年の時はあまり目立っていなかったなので誰も彼が『鬼神』とは分からなかったという設定です。
では、また次回で。

二話 勝てる根拠

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本がAクラスへの宣戦布告をするとクラス中から悲鳴が上がる。

『勝てる訳が無い』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何も要らない』

そんな既に勝負を諦めている悲鳴。

悲鳴を上げていないのは宣戦布告をした坂本、事前に相談を受けていた為か喜んでいる様な明久、

その他少数だ。

確かにAクラスに対し俺達Fクラスが試験召喚戦争を仕掛ける等愚かな行為だ。

だが、俺は坂本の目に確かな自信がある様に見えた。

「勿論、勝てる要素はある。

おい、康太。畳に顔を付けて姫路のスカートを覗くな」

「……！（ブンブン）」

変態かあいつは。

「は、はわっ」

姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかった。

すると土屋は顔に付いた畳の後を隠しながら檀上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあムッシュの寡黙なる性識者だ」

聞いたことがある。

保健体育では異常な点数を取りその名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以って上げられる伝説の男。

「姫路のことは説明する必要も無いだろう」

どれ程優秀か分からないが見た目で優秀だと言つことは分かる。

「木下秀吉だつて居る」

聞いたことあるな。

姉のこととか演劇部のホープだとか。

「当然俺も全力を尽くす」

確か小学生の頃坂本雄二とか言う奴は神童だつて良く父親が言つてたな。

あいつが……

気が付くとクラスの士気は上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

そして一瞬で下がった。

あいつ……この学校で本気を出していないんだな。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！今は僕の名前を呼ぶ必要無いよね！」

『僕』？あいつ確か昔自分のことを『俺』って言って無かったか？

「それに僕よりも隼人の方が頭良いから！」

「おい、明久何で俺を呼んだ？」

俺とお前の頭の出来は殆んど同じだろうが。

『明久と桐岡って知り合いだったのか？』

『まじかよ……』

面倒なことになった！

これも全部吉井の所為だ！

「吉井、死にたいのか？」

俺がそう言つと吉井は小声で俺にしか聞こえない様にこう言つた。

「頼む！今は士気を上げる為に協力してくれ！

このクラスの設備を何とかしたいんだよ！」

「何でだ？」

「姫路は身体が弱いんだ。

こんな不衛生な場所に居たらいつか倒れる」

「……………」

成程……こいつの優しさは昔のままと言う訳か……

少しは素直になったんだな……

「良いだろう。」

その代り……一つだけ言うことを聞け。
命令はいつか話す」

「分かった」

俺は明久を解放してクラス全員に向き直った。

「俺は祖父がこの学校の学園長の知り合いだったから試験召喚システムがこの学校に導入される前から召喚獣のデータを取る為に働かされていた。」

だから召喚獣の扱いはお前等だけじゃなく先輩にも勝る」

実際、俺の召喚獣はロケットランチャーや刀それに
アサルトライフルも持っている。

更にフィールド外でも召喚出来る。

「見せてやろう試験^{サモン}召喚」

すると俺の幾何的な魔方陣が現れる。

そして姿を現した召喚獣の右腕にはロケットランチャー、左手には
刀、背中にはアサルトライフルを
持っている。

「これが俺の召喚獣だ。」

因みにフィールド外でも召喚出来るのは学園長が改造した。
もっと言うと点数はこうだ」

パチンツ！

俺が指を鳴らすと点数が現れる。
いつもデータの為にあのババアが俺に上限が無いテスト受けさせていた為に点数が良くなった。
勉強したのもそのテストの為だったな……

『Fクラス桐岡隼人

総合教科 8000点』

『『『はああああっ！？』『』『』

まさか、ここまで驚くとは思わなかった。

因みにクラス振り分けテストを受けていないのに点数を持っている理由としては

あのババアの研究の手伝いの為に特別なテストを受けていたからだ。

「おかしいだろ！お前何者だよ！？」

「只の人間だ。

明久、お前が俺を説得したんだ。

お前も全力を出せよ」

「……分かつてる」

本気を出すのが何でそんなに嫌なんだ？
良く分からね。

「お、驚いたこともあったが、使者は明久にしてもらっ

「分かったよ」

普通そこは嫌だと言うところだぞ？

下位勢力の宣戦布告の使者は大抵酷い目に遭うんだから。

「一応俺も着いて行く。」

こいつは冷静な判断が出来て無いからな」

「分かった」

その返事を聞いて俺と明久はDクラスに宣戦布告に向かった。

二話 勝てる根拠（後書き）

11/27 物語の構成の為に少し修正しました。

三話 宣戦布告

突然だが俺達は逃げている。

Dクラスからだ。

宣戦布告をしたらDクラスの連中が掴みかかってきやがった。

本当なら半殺しにしても良かったが明久曰く『問題を起こすのは不味い』とのことで

全力で逃げている。

「お前、昔は問題なんて気にしない奴じゃなかったか？」

俺は走りながらそう聞いた。

「昔の『俺』は死んだんだ。

だから、こそ『俺』は『僕』になったんだよ」

成程……だからこいつは……

「変わったな……」

俺は明久に聞こえない様にそう言った。

もしかしたらこいつとまた……仲良くなれる様な気がした……

「もう少しで教室だ！頑張るぞ！」

「分かっている」

俺はDクラスの扉を開けた。

明久が入り俺も入って扉を閉める。

そして帰って来た俺達に坂本は一言。

「やはりそうだったか」

一瞬こいつに対して強い殺意を抱いた。
いや、むしろやっても構わないだろう。

「隼人、やれ」

明久からも許可は出た。

俺は拳を固めてゆつくりと坂本に近づく。

「ちょ、待ってくれ」

「良いだろう遺言を残せ」

「すいませんでした!」

坂本はそう言つて頭を下げた。
それを見て明久は頷く。

「歯をくいしばれ」

「ちょ!ぎゃああああああっ!」

少々お待ちください

「ずびまぜんでじだ」

骨格が変わるまで殴ってやっても良かったが明久がそれは不味いと言ったのでやめてやった。

「さて、馬鹿の始末はしたからさっさとミーティングをするぞ」

そう言って俺は坂本の首を掴む。

「さあ、皆、レッツゴー！」

「「「お、おおー……」」」

皆何を恐れているんだろう？

俺達は大して威圧感等出していないと言っのに……

屋上

ミーティングの場所に俺達を選んだのは屋上。
吹いてくる春風が気持ち良い。

「さて、俺達は午後に関戦予定と告げて来た」

俺はそう言いながら坂本を解放しフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

明久達もそれに倣い各々腰を下した。

「そ、それじゃ、先に昼食ってこと？」

恐る恐る島田がそう尋ねた。

俺の第一印象が余程怖かったのだろう。
まあ、日頃の行いが行いだからな。

「そうだ、それより明久。パンを奢ってやるからちゃんと食えよ」

「分かってるよ」

それを聞いて姫路が驚愕の表情で明久を見てこう尋ねた。

「明久君ってお昼食べない人なんですか？」

彼女は規則正しく食べているのだろう。
何だかそんな感じがする。

「いや。一応食べてるよ」

その言葉に坂本の横槍が入る。

「あれは食べてると言えるのか？」

それに同調して俺もこう言った。

「明久の主食は水と塩と砂糖だろ？」

「それだけあれば充分さ！」

そう言いながら笑顔で親指を立てる。
笑顔でそう言うがな、人間は普通それだけでは生きていけないんだぞ、明久……

「さて、話が逸れたな」

そう言えば試召戦争の話をしていたのに忘れていたな。

「雄二、そう言えば何でDクラスに勝負を仕掛けるのじゃ？段階を踏んで行くならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「あれだろう。」

Dクラスとは戦う理由が無いからだろう」

俺がそう言うのと坂本が感心した様な表情を浮かべる。

そして、坂本は俺に続ける催促した。

「Fクラスに居るのは天才一人と馬鹿が一人、ムツツリが一人だ。

それにEクラスは俺と明久の二人だけで潰せる。

だから、Eクラスとやりあっても何の得も無い」

「本気になった明久の実力を俺は知らないから本当に二人で潰せるか知らないが

そう言うことだ。

それに打倒Aクラスの作戦の為に必要なプロセスだしな」

その作戦が良く分からないがまあ良いだろう。

代表はこいつだ。

「ところで坂本、Dクラスの後はどこに攻め込む？」

坂本は俺にしか聞こえない様にこう言った。

「B」

「分かった。」

「ならばBクラスとの戦争で俺も参加する」

「Dとの戦争では参加しないのか？」

「遠距離攻撃だけだ。」

「Bクラスに俺の存在を警戒させたくない」

「分かった」

俺は明久に向き直りこう言った。

「明久、Dクラスと戦争ではお前が全力を出せ。」

「俺は色々あって遠距離攻撃しかできない」

「それでも良いよ。」

「雄二、そろそろ作戦の説明をしてくれない？」

「分かった。説明を始める」

俺達は坂本が立てた勝利の為の作戦に耳を傾けた。

四話 Dクラス対Fクラス

明久side

「吉井！渡り廊下で木下達が戦闘に入ったわよ！」

そう言つて島田さんが前線の状況を報告してくる。

僕は耳を澄ませて前線の状況を探る。

因みに僕は中堅部隊の隊長だ。

『くそ！やはり点数の差がある！』

『押されてるぞ！もっと頑張れ！』

『補習室なんかに行つてたまるか！』

どうやら状況はあまり芳しくないらしい。

そう思つて僕は隼人から渡されたインカムで隼人に連絡を取る。

「隼人、今から僕達は前線の援護に行く。

遠距離から援護してくれ」

『了解、死ぬなよ』

「僕を誰だと思つてるんだ？」

『そうだったな』

隼人のその言葉を聞いて僕は部隊の皆の方を向いた。こう号令した。

「全員突撃しろ！」

その号令と共に皆全力で戦場に向かう。

すると秀吉が前で戦っていた。

秀吉の表情から戦死寸前だと言っていることが分かる。

そんな秀吉が二方向から攻撃を仕掛けられていた。

「隼人！右を頼む！」

パアアツン！

僕がインカムで隼人にそう言った瞬間そんな音が鳴り秀吉の召喚獣を右から攻撃しようとしていた召喚獣に穴が開き戦死した。流石隼人だ。

仲間がいきなり戦死したのを見て左側の召喚獣が戸惑い始める。

秀吉までもが戸惑ってチャンスの際に攻撃出来ていない！

「^{サモン}試獣召喚！」

僕の声に呼び声に応じて召喚獣が現れる。

僕の召喚獣は一瞬で秀吉の近くの敵の傍に移動し頭を持って地面に叩きつけ鳩尾を殴る。

その隙を見逃さず倒れている敵の召喚獣の頭を持って思いっきり投げる。

パアアツン！

そんな音が鳴って敵の召喚獣が戦死。

これで二人を補習室に送った。

「吉井！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴等、化学教師を連

れて来たわ！」

見ると確かに二年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭が渡り廊下に居た。

連中、学年主任だけだと時間がかかるから立会人を増やして一気に勝負を付ける気か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全く無し、六十点台常連よ」

しょうがないか……

クソ！真面目に試験を受けて無かったのが仇になった！

「取りあえず、学年主任の所に行こう」

「高橋先生の所ね？了解！」

何とか敵に見つからない様に移動する。
すると

「あつ、あそこに居るのはFクラスの美波お姉様！五十嵐先生！こっちに来てください！」

「くっ！ぬかったわ！」

このままじゃ二人共揃って補習室送りだ！

「島田さん！行ってくれ！僕が何とかする！」

「何言ってるの！無理に決まって『うるせえ！さつさと行け！』！？」

「俺が負けると思ってるのか！俺は負けねえ！だから行け！」

「…………補習室に行かないでよ！」

そう言って島田は移動しようとする。

ふっ…………ホントらしくねえ…………

「お姉さま！逃がしません！」

そう言って島田をお姉さまと呼んでいる女子が島田を追おうとする。
その前に俺は木刀を構え立ちふさがる。

「隼人、島田のフォロー頼む」

『了解だ』

「邪魔をする人は殺します！」

そう言って女の召喚獣は俺の召喚獣に斬りかかるが…………

「遅い…………」

がら空きの身体に木刀を滑り込ませる。

木刀は敵の召喚獣の鳩尾にヒットした。

すると召喚獣の頭上に戦闘力（点数）が浮かび上がった。

『Fクラス 吉井明久 VS Dクラス 清水美春』

化学 20点 VS 73点

」

ちっ！大したダメージにならないか！

「殺します…殺します…殺します…」

島田も厄介な奴に狙われたものだ。

こいつ頭逝ってんだろ。

「この……！」

「冷静な判断も出来ないのかかかってくんないよ」

俺の召喚獣はかかってくる敵の召喚獣の顔に木刀を入れる。

普通の女なら外道だけど召喚獣だから良いだろう。

敵の召喚獣は起き上がるうとするが俺は立ち上がるうとする敵の召喚獣の頭を思いっきり木刀で叩く。

『Fクラス 吉井明久 VS Dクラス 清水美春
化学 20点 VS 30点
』

まだ戦死はしていないようだ。

まだまだ終わらせない。

何度も何度も餅の様に叩く。

そして

『Fクラス 吉井明久 VS Dクラス 清水美春
化学 20点 VS D A E D
』

これで敵の召喚獣は戦死。

「西村先生！この女よろしく願います」

「ああ、清水、こっちに来い。

……やっと本気になったか」

そう呟いて西村先生は清水とか言う女子は補習室に連れて行かれた。

「吉井明久！覚悟してくださいね！」

色々危険なことが聞こえたが無視しよう。
そんなことを思っていると

『（ピンポンパン）連絡いたします』

ん？何だ？須川か？

『船越先生、船越先生』

船越って数学の……

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

は？

『教師と生徒との垣根を越えた話しがしたいそうです』

あのクソ野郎！

「隼人、俺は一端抜ける！頼めるか！？」

『一端Fクラスの前線の奴等を伏せさせろ。
後はアサルトライフルの状態をセミオートからフルオートにして敵を一掃する』

「了解！Fクラス！一端伏せる！とんでもない攻撃が来るぞ！」

俺が召喚獣を伏せさせてからそう言つとFクラスの召喚獣と生徒が一度伏せる。
すると

パパパパパパッ！

そんな破裂音共にDクラスの召喚獣に次々と攻撃が当たる。

「おっと、こんな物見てないで須川を死刑にするか。
つてこれじゃ昔の俺は死んだとか隼人に言えないじゃないか」

でもそんなことは関係ねえ。

俺はそんなことを思いながら放送室に向かい須川をボコボコにした。
その後戦況は隼人のおかげでD組はボロボロ。

姫路がD組代表にトドメを刺してこの戦争は俺達の勝ちに終わった。

五話 Dクラス戦闘後

Dクラスとの戦争後、須川をボコボコにした後僕はDクラスの教室に引き摺ってここ、Dクラスの教室に居た。雄二はDクラスの代表と話している。

「明久、そんなに怒ってやるな。勝つ為に必要だったことだ」

隼人はそう言いながら僕の肩に手を置いた。

隼人が言いたいことは分かる。

あの放送は先生達を騙す為の物だ。

その位のことは分かっている。

でも……！

「相手が船越先生だと言うことと呼び方が問題なんだよ！」

船越先生は婚期を逃してついに、生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった先生だ。

須川をボコボコにした後に船越先生に会いに行つて誤解を必死に解いてい無かつたら

今頃僕の貞操は……！

考えるだけでも恐ろしい……

そんなことを考えているとDクラスの代表と話を終えた雄二が近づいてきた。

「坂本、話は終わったのか？」

「ああ、上手くいったぜ」

そう言つて雄二は親指を立てた。

恐らく何か交渉していたんだろう。

すると、隼人も同じ考えに至ったのか隼人が尋ねた。

「どんな交渉をしてたんだ？」

「俺が指示を出したらBクラスの室外機を動かなくてして欲しいと言つたんだ」

確かスペースの関係で間借りしている物の筈だ。

多分Bクラスとの戦いの作戦で必要になるんだろう。

「それより、明久、明日は本気でやれよ？」

明日は消費した点数を補わないといけないんだからな」

「分かつてるよ」

『本気を出せよ』と言われて肯定した以上は本気を出さないといけないだろう。

隼人に頼りきる訳にはいかないしそのつもりも無い。

「あの、明久君……」

帰る準備をしていると姫路さんが廊下から声をかけてきた。

僕は呼ばれた通り姫路さんに近づいた。

「どつしたの？」

そう言つと姫路さんは胸ポケットから一枚の折りたたまれた紙を渡して僕に渡して来た。

姫路さんは僕に目で広げる様に催促した。
僕はその通りに紙を広げた。
紙にはこう書かれていた。

『あなたのことが好きです』

見間違いだと思って僕は目を擦ってもう一度確認する。
そこには間違いなくこう書かれていた。

『あなたのことが好きです』

これって僕に対して？

いや、ちよつと待てや。

おかしくないか？

何で俺なんかに？

つと、いつの間にか俺口調になってた。

「これ、本気？」

「はい」

その目を見て嘘をで言っている様な物では無いことが一瞬で分かった。

本当ならここで即答しなくちゃいけないんだろっけど……

「今はまだ答えることは出来ない」

僕は……俺は首を横に振りながらそう答えた。

「何ですか？他に好きな人が？」

「いや、居ない。」

でも、まだ答えることは出来ないんだ」

俺はまだやらなくちゃいけないことがある。

それをしていないのに誰かと付き合うなんて出来ない。

俺は紙を渡してこう言った。

「まあ、もしかしたらいつか俺の方から告白するかもしれないけど……」

「そうですか……でも、私は絶対に諦めませんから」

そう言って姫路は帰って行った。

「告白されたか」

「うわあっ!」

心臓が止まるかと思った……

もしかしてこいつは俺を殺したいんじゃないんだろうか……

「そこまで驚くことは無いだろう。」

人を幽霊みたいに……全く」

「気配が無い所からいきなり声をかけられれば誰でも驚くだろうが」

「それは悪かったな。」

で？告白されたのか？」

「ぐっ！」

話を逸らそうと思ったのに……！
今更話を逸らしても遅いか……
素直に話す他無いな……

「ああ、告白されたよ」

「そうか。」

なら、それだけだ」

隼人はそう言いながら踵を返して去って行った。
ホント……言わなくても心の内を分かってくれる友達って居ると嬉しいもんだな……

「さて！明日はテストだ！」

本気でやって隼人の足手纏いにならないようにしないとな。
そんなことを思いながら俺は家に帰って行った。

八話 Bクラス戦（前編）

今僕達はBクラスを相手に試験召喚戦争をしている。

最初は隼人がBクラスの前線にマシンガン撃つてたけど一日に百発しか撃てないから弾切れを起こした為今は接近戦闘を行っている。

僕や隼人は圧倒的にBクラスよりも点数が高いけど周りの仲間はBクラスよりも圧倒的に点数が低いから次々に補習室拷問室に送られている。

「明久！ここは一端引いた方が良く！何故だか分からないが総司令塔の姫路から指示が来ない！」

ここは回復試験を行った方が良く！」

「分かった！殿は僕がやる！教科選択サブジェクトセレクトをやってくれ！」

『教科選択サブジェクトセレクト』

隼人が持っている『光の腕輪』の能力。

ランダムで一つの教科の点数を半分にする代わりにフィールドの教科を自由に選べる。

「分かった！教科は？」

「日本史で！」

「任せろ！教科選択！日本史！」
サブジェクトセレクトジャパニーズヒストリー

隼人がワードを言うとフィールドが日本史に変わった。

「明久！」

隼人は腕輪を僕に投げ渡すと撤退していった。
Fクラスの皆も撤退していく。

『敵は吉井一人だ！一人だけだったら俺達にも勝ち目はある！』

『一斉攻撃だ！』

『やれえええつ！』

Bクラスの生徒が僕の召喚獣に襲い掛つて来る。

さて、突然だが僕が日本史を選んだ理由を説明しよう。

この学校のテストの教科は現文、古文、数学、日本史、世界史、化学、物理、生物、保健体育の九教科。

僕が普通に試験を受けると総合教科で約8000点。

一番高い点数は日本史だ。

勿論それだけでは僕だけで殿はやらない。

僕だけでやった理由は勿論ある。

その理由は日本史の点数だ。

その点数とは

『Fクラス 吉井明久

日本史 2000点』

『『『な、な、な、何だつてええええええつ！？』』』

そう言うことさ。

僕は日本史が圧倒的に他の教科よりも高い。
だからこそ僕は殿を務めたんだ。

「さあ、始めよう」

遊びをね……

隼人 s i d e

「こんなの誰が……」

クラスの誰かが呟いた。

もしかしたら俺が呟いたのかもしれない。

何故なら……卓袱台や鉛筆がボロボロになっていたから……

「根本の野郎だ！間違いない！」

確かに根本の奴は勝つ為ならば何でもすると噂で聞いた。

だが根本は今Bクラスの教室に居る筈だ。

こんな真似は出来ない。

他に根本と通じている奴がやった筈だ。

一体誰が……！分かった。

「坂本、根本には確か彼女が居たな？C組代表の」

「あ？ああ、でも、それが……あ！」

「やられたな……」

その彼女を使ってC組の奴等に根本が指示をしたんだろう。

何て外道な奴等だ……！

良いことを思いついたぜ。

「木下、お前にはAクラスの姉貴が居たな？」

「む？それがどうかしたかの？」

「坂本、女物の制服を調達しろ」

「は？そんな物……成程」

坂本も俺の考えに気が付いたのかニヤリと笑った。
さて、CクラスとBクラスには敗北の屈辱をくれてやろう……

Cクラス前

俺達はCクラス前の廊下に居た。
作戦としては木下にAクラスの姉貴の演義をさせてAクラスにCクラスをぶつけて
Cクラスにこれ以上馬鹿な真似をさせないようにするということだ。
それで木下が先程入ったのだが……

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

始まったか。

しかし『豚ども』とは……言い過ぎの様な気が……

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちよつと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

これはCクラスの代表だろうか？
声からして怒っているな。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴方達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

誰もFクラスが豚小屋とは言って無いだろう……
実際豚小屋並に汚いが……

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟してなさい。
近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言つて木下が教室から出て来た。

『皆！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

良し、ひかかったか。
木下も中々やる。

「良し、お前等戻るぞ」

その言葉にその場に居た全員が頷いた。

さて…… 一気にBクラスとの決着を付けるかな……

俺は気付かぬ内に口の端を吊り上げた。

八話 Bクラス戦（前編）（後書き）

11 / 24

隼人の腕輪の名前を付け加えました。

九話 Bクラス戦（中編）

僕はやるべきことをした後Fクラスの教室でお茶を飲んでいた。

「ふう……」

お茶が美味しい……

やっぱりお茶は日本茶に限るな……

「お前は何してるんだ？」

そんな声がしたかと思ひ声がした方を向くとそこには秀吉や雄二や姫路さんや美波、そして隼人も僕のことをジト目で見ていた。

「隼人、これありがと」

そう言つて隼人に光の腕輪を投げ返す。
隼人はそれを取つて自分の腕に付けた。

「それで？お前は何をしているんだ？」

「日本茶飲んでる」

パコンッ！ザスッ！

「うぎゃあああああつ！目が、目があああああつ！頭も痛いいいいつ！」

正直に言つたのにこの扱いは何だよ！

僕が何をしたんだ！

「お前は馬鹿か！Bクラスが攻めて来たらどうするんだ！」

「頭は良いのに何で行為は馬鹿なのよ！」

そう言いながら僕に更なる追撃をかけようとする美波と野獣。
それを止めているのは隼人と秀吉。

「イタタ……大丈夫だよ、やるべきことはやったから」

目を押えながら僕はそう言った。
その言葉を聞いて皆は首を傾げている。

「吉井君、やるべきことと言つにはどう言つことですか？」

「え……とね……」

約一時間前

今は前線の部隊の部隊を倒した後。
後残っているのは教室に居る部隊だけ。

「さてと……Bクラスの教室に乗り込むかな？」

僕はそう呟きながらBクラスへの教室へと歩き出した。

Bクラス教室

『吉井だ！打ち取れ！』

Bクラスの教室に入った瞬間そんな号令が聞こえたかと思うと一気にBクラスの皆の召喚獣が僕の召喚獣に襲い掛った。

「遅い！」

光の腕輪が起動している限りフィールドは日本史になる。
この学園において僕に日本史の点数で勝てる者は居ない。

『Fクラス 吉井明久 VS Bクラス 全員
日本史 2000点 VS 2000点』

今Bクラスで戦える人数が大体十人位だから一人2000点位かな？
いくら数で来ようが今の僕の状況は2000点の人達と十回戦うだけ。
そんなの苦ではない。
むしろ……楽しい位だ。

「さあ……かかってきなよ……遊んであげるから……」

『『『（ゾクッ！）』』』

時は戻りFクラス教室

「とまあ、そんな訳で根本君以外の戦力を補習室《拷問室》に送っ

て帰って来たよ」

Dクラスに室外機を壊させたのが無駄になったけどそこら辺は許してくれると信じている。

「……鬼だな」

なんて失礼な。

僕以上に優しい人はこの世に存在しないと言うのに。

「で？卑怯で下衆でこの世に存在しない方が良い奴ナンバーワンの根本はどこに居るんだ？」

「まだ戦力はあるけど召喚獣を召喚される前に縄で縛って気絶させたよ」

仮にもFクラス代表の雄二と話をさせる前に逃げられたらたまった物じゃないからね。

と言うか雄二も人のこと言えないじゃないか。
さりげなく根本君を侮辱してるし。

「そうか、なら行くぞ！Bクラスの教室へと！」

「「「おおー！ー！」」」

雄二の号令で僕たちはBクラスの教室へと向かうことになった。
でも、その時僕は知らなかったんだ。

それが……かつての『俺』を起こす結果に繋がることを……

十話 Bクラス戦（後編）

僕達はBクラスの教室に西村先生を連れて居る。
そこに居たのは僕が縄で縛った根本君。

「何で亀甲縛りなんだ？」

「そこは気にしないで」

後女子の三人（秀吉含む）は何で顔を赤らめないで。

「まあ、野郎が縛られてる所なんて見ても気持ち悪いだけだから解くぞ？」

そう言つて隼人は根本君の縄を解く。

それより野郎が縛られてる所は気持ち悪いってことは女なら良いのかな？

「さて、根本恭二、お前に保健体育勝負を申し込む。
試獣召喚^{サモン}」

「くそがあああつ！試獣召喚^{サモン}！」

『Fクラス	桐岡隼人	VS	Bクラス	根本恭二
保険体育	750点	VS	203点	』

お互いの召喚獣が現れ点数が表示された瞬間隼人の召喚獣が根本君の召喚獣を斬り裂きBクラス戦は
終結した。

……が

「てめえらあああつ！絶対にゆるさねからな！まず最初に姫路！これが何だか分かるよな！？」

「！」

根本君が一枚の紙を出した瞬間姫路さんの表情が硬直した。
まさかあれは……僕に告白した時の手紙！？
落としたのを取られたのか！

「Fクラスを负けるようにしろって言ったのに無視しやがったな！？
こいつをコピーして学校中にばらまいてやるよ！」

こいつ……！姫路さんを脅迫しやがったのか……！
そう言う思考に至った時僕の……俺の『何かが弾けた。』

第三者視点

根本が『学校中にばらまいてやるよ』そう言って少しするとBクラス
の教室内にとてつもない殺気が
放たれた。

その殺気は負の感情全てを含んだ様な不快な殺気。
この殺気を感じた時隼人は驚愕の表情を浮かべた。
それは殺気に驚いた訳ではない。
いや確かに殺気に驚いたと言うのは事実だ。
隼人が驚いたのは殺気を放った人物だ。

「明久……？」

隼人が明久の方を向くと明久は俯いていた。
そして明久が顔を上げるとそこには『かつての明久』が本気で怒った時の顔があつた。

「根本くううん、何てこと言うのかなぁ？」

明久の顔は……笑顔。

だが、その笑顔は楽しい笑顔では無い。

狂気を纏った笑顔だ。

その顔を見た瞬間根本は悟った。

『俺は怒らせてはならない奴を怒らせた』と

明久はゆつくりと笑いながら根本に近づく。

誰も止められない。

雄二も、姫路も、島田も、土屋も、秀吉も、西村も隼人すらも全員止められない。

ただ嫌な汗を掻き明久を見ているだけだ。

見ていたくは無い。

でも、目をそらせられない。

あまりの圧力で顔すらも動かせないのだ。

「いけないことだよねえええ？脅迫つて言うのはさああああ」

「く、来るな！来ないでくれ！」

根本がそう言っても明久と根本の距離は少しづつ狭まっていく。
動けない。逃げたいのに逃げられない。

隼人はその光景を見て昔のことを思い出していた。

かつて明久は仲間不良が手を出した時こんな風に怒っていた。

その時の不良は全員もうこの世には居ない。

このままではあの時の様になってしまう。

その考えに至った時明久は拳を振り上げていた。
それを見て隼人は動いた。

「はあっ！」

「ぐっ！」

隼人は明久を壁に吹き飛ばした。

常人ならば気絶する程の拳。

だが明久が気絶したことは無かった。

「いったいなああ……隼人、何するんだよ？」

明久はゆっくりと立ち上がる。

その顔は今だ狂気を纏っているが先程よりも狂気は薄くなった。

「お前にこれ以上暴力を振わせる訳にはいかないんだよ」

隼人はそう言つて身を低くし一気に明久に近寄る。

狙いは人体の急所。

急所を狙つて短時間で決着を着けようとしているのだ。

だが、明久もそこまで甘くは無い。

一撃一撃を防御しながら反撃をする。

実力はほぼ同じだ。

だが、明久は怒りで冷静が出来ていない。

だから、隼人が生み出している隙があると気付かない。

「はあっ！」

明久は隼人がわざと生み出している隙を突く。
隼人はこれを待っていたのだ。

いつもの明久ならばこの隙は不自然だと気付く。
だが、冷静でない明久ならばこの隙を突く。

そう思つて隼人はわざと隙を作った。

隼人は拳の勢いを使い一本背負いを使い明久を投げた。

明久を投げた後隼人は明久の鳩尾を殴つてようやく明久を気絶させた。

「はあ……はあ……皆、明久を、保健室に、運ぶぞ」

隼人がそう言つと雄二達は頷いた。

隼人 side

保健室

「あれが昔のアキなの？」

保健室に明久を運んだ後少し落ち着いて島田はそう呟いた。
他の面子も俺を見ている。

俺は少し考えて答えた。

「あれは明久が本気でキレた時の明久だ。
あの明久を鎮めるには見た通り苦労する」

「そう……」

その場に嫌な沈黙が流れる。
その沈黙がしばらく流れると

「んん……」

明久が気を取り戻したらしい。

明久は体を起して周りの様子を見る。
そしてこう言った。

「ここはどこだ？お前達は……誰だ？」

十一話 二人の過去（前編）（前書き）

オリキャラ紹介

今回出てくるオリキャラを紹介します。

桐岡 佐波

隼人の姉。

医療に関することならば天才と言われ大病院桐岡病院の院長。
隼人が将来医者 of 道に進むことを期待しているが本人は断っている。

幸崎 美冬

明久と隼人がロサンゼルスであつた少女。
明久が不良から助けた。

（後書きにネタバレがあります。
相当のネタバレです。
読みたくない人は飛ばしてください）

十一話 二人の過去（前編）

ここは桐岡病院。

名前から察する通り俺の家が経営している病院だ。

明久が起きた後俺達はBクラスの外道代表と話を付けてここに来ていた。

「姉貴、どうだ？」

俺がそう尋ねたのは俺の姉貴『桐岡 佐波』

この病院の院長だ。

姉貴は動物と言われる類の物ならばどんな動物でも治せる医療の天才。

だから明久をここに連れて来た訳だ。

「あんた、予感してるんでしょ？」

「まさか……俺の勘は当たってるのか？」

俺の問いに姉貴は頷いて答えた。

「間違いないね。精神的な負担が来て記憶が欠落したんだよ」

「……………」

精神的な負担と言えば……本気でキレたことか。

あれ以外に精神的な負担は考えられない。

「治す為にはやっぱり普通の生活を送らせた方が良いか？」

「そうだね。良い刺激を与えてあげるとボンツと思い出すことがあるから。」

それと分かってるよね？」

「ああ、姫路には言わない」

もし、姫路に言えば姫路は自分のことを責める筈だ。そんなことを明久は望まない。

「それじゃな、姉貴」

俺はそう言つて扉を開けて部屋から出た。

「「「桐岡（君）！」「」」」

俺が部屋から出た瞬間坂本達が俺の周りに集まって来た。それ程明久の診査結果が気になるんだろう。

「明久は普通の生活を送って良いそうだ。何か良い刺激を与えてやると良いらしい」

俺はそう言いながら近くのソファに腰掛ける。すると、坂本が言い難そうにこう言つて来た。

「明久の昔のことを教えてくれないか？」

「昔？中坊の頃のことか？」

坂本はその問いに頷いて肯定する。

「……俺達は明久の昔のことを知らない」

「ムツツリー二の言う通りなんだ。

姫路も小学校の頃を知ってるけどあんな風になったことは無いって
言ってる。

だから知りたいんだ」

「教えて、アキは中学生の頃はどんなだったの？」

「教えてください」

四人の顔は至極真面目。

興味本位で聞いている訳じゃないと分かる。

「分かった。少し長くなる、座れ」

俺がそう言つと四人共ソファに腰掛ける。

俺はそれを見て話始めた。

中学二年の頃のあの頃ことを……

隼人達が中二の頃ラスベガスのあるカジノ（日本語でお送りします）

「ロイヤルストレートフラッシュ」

俺はそう言つて五枚のカードをその場に置く。
相手の顔が蒼白になっていくのが分かる。

「ガキ！イカサマをしただろう！」

そう言って相手は俺に指差してイチヤモンを付けて来た。
これでもう十回負けてるからな。

イカサマだと言いたくなる気持ちは分からなくもない。
だが、真面目にやってるこちらとしては言われたくないセリフだ。

「そうやって言い訳するのはやめてもらおう。

この結果は実力だ。そもそもここがどんな場所か」

実はこのカジノは裏カジノ。

イカサマをしたらその場で男だろうが女だろうが良く分からない場所
所に連れて行かれる。

更にここのディーラーは特殊な訓練を受けたスペシャリスト。

イカサマをしたら絶対にバレる。

「ディーラー！このガキはイカサマをしてないのか！」

今度はディーラーに文句を言い始めたか。

どれだけ俺がイカサマをしたと思いたいんだ。

「していません、このお方は実力であなたに勝っています。

これ以上騒がれると他のお客様のご迷惑になりますので『特別処置』
を取らざるをえなくなりますのでご注意ください」

「っ！」

ディーラーが『特別処置』を取ると言った瞬間男は静かになった。

まあ、俺でも静かになるだろうな。

そんなことを思っている

「隼人、どれ位稼いだ？」

そう言つて手に多くのコイン入れを持つて来たのは明久だ。
こいつもこいつで別のゲームで稼いでいた。

「これ位だ」

俺はそう言つて成果を見せる。

成果を見ると明久は感心して口笛を吹いた。

「もう良いだろ。さつさと出ようぜ」

明久はそう言つて出口へと向かった。

その後俺達は出口近くで換金してカジノから出た。

ラスベガスの道

「しかし、あのオッサンうるさかったな」

明久はそう言いながら金の入っているアタッシユケースを振りまわしている。

……今、アタッシユケースが頭を掠めた。

「しょうがないだろう。あのオッサンはこちら辺でも有名な奴だつたからな。

それとお前、アタッシユケースを振りまわすのをやめろ。
当たり所が悪かったら死ぬ」

「あ、悪い」

そんなやり取りを取りながら俺達は歩く。

ここから宿泊先のホテルまでそんなに時間はかからない。
夕食までには帰れる筈だ。

そんなことを思っている

「やめてください！（英語）」

そんな叫び声が聞こえて来た。

その声の方を向くとそこには一人の少女が五人の不良に絡まれている光景があった。

「はあ……ああいうの見てると不愉快だな……これちょっと見てくれ」

明久はそう言っアタッシュケースを置いて不良達の方に歩いて行く。

一分も待てば……

「このガキ覚えてろ！（英語）」

とまあ、負け犬の出来上がりだ。

明久は絡まれていた少女を連れてこっちにやって来た。

「隼人！この子日本人だつてよ！」

あいつ……そんなことを大声で言わなくても良いだろうに……

「えっと……助けてくれてありがとうございます。」
『幸崎 美冬』って言います（ニコ）」

俺はその時、幸崎に対して抱いた感情に気付かなかった。

十一話 二人の過去（前編）（後書き）

幸崎 美冬のネタバレ情報。

明久の元彼女。

そして隼人の初恋相手。

明久は隼人の気持ちに気付き美冬をふった。

その時の会話を隼人が聞いておりふった時に美冬が泣いたのを見て明久に

対しキレた。

キレた時に隼人は明久に全治五カ月の怪我を負わせた。

実はその時、現地の野球チームにスカウトされており明久は問題を起こし

たと判断されその道を閉ざされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289y/>

バカと少年とドタバタ生活

2011年12月1日18時03分発行